

白髮鬼

岡本綺堂

青空文庫

S 弁護士は語る。

私はあまり怪談などというものに興味をもたない人間で、他人からそんな話を聴こうともせず、自分から好んで話そうともしないので、若いときにたった一度、こんな事件に出逢ったことがあって、その謎だけはまだ本当に解けないのです。

今から十五年ほど前に、わたしは麴町の半蔵門に近いところに下宿生活をして、神田のある法律学校に通っていたことがありま

す。下宿屋といつても、素人家しろうとやに手入れをして七間まほどの客間を造つたのですから、満員となつたところで七人以上の客を収容することは出来ない。いわば一種の素人下宿のような家で、主婦は五十をすこし越えたらしい上品な人でした。ほかに廿八九の娘と女中ひとり、この三人で客の世話をしているのですが、だんだん聞いてみると、この家うちには相当の財産があつて、長男は京都の大学にはいつている。その長男が卒業して帰つて来るまで、ただ遊んでいるのもつまらなく、また寂しくもあるというようなわけで、道楽半分にこんな商売を始めたのだそうです。したがって普通の下宿屋とはちがつて、万事がいかに親切で、いわゆる家族的待遇をしてくれるので、止宿人ししゆくにんはみな喜んでいました。

そういうわけで、私たちは家の主婦を奥さんと呼んでいました。下宿屋のおかみさんを奥さんと呼ぶのは少し変ですが、前にも言う通り、まったく上品で温和な婦人で、どうもおかみさんとは呼びにくいように感じられるので、どの人もみな申合せたように奥さんと呼び、その娘を伊佐子さんと呼んでいました。家の苗字は——仮りに堀川と置いて置きましょう。

十一月はじめの霽はれた夜でした。わたしは四谷須賀町のお酉とりさまへ参詣に出かけました。東京の酉とりの市まちというのをかねて話には聞いていながら、まだ一度も見ることがない。さりとして浅草まで出かけるほどの勇気もないので、近所の四谷で済ませて置こうと思つて、ゆう飯を食つた後に散歩ながらぶらぶら行つてみることに

になったのですから、甚だ不信心の参詣者というべきでした。今夜は初酉だそうですが、天氣がいいせいすこぶか頗る繁昌すこぶしているので、混雑のなかを揉まれながら境けいだい内と境外を一巡して、電車通りの往来まで出て来ると、ここも露天で賑わっている。その人ごみの間で不意に声をかけられました。

「やあ、須田君。君も来ていたんですか。」

「やあ、あなたも御参詣ですか。」

「まあ、御参詣と言うべきでしょうね。」

その人は笑いながら、手に持っている小さい熊手と、笹の枝に通した唐とうの芋とを見せました。彼は山岸猛雄——これも仮名です——という男で、やはり私とおなじ下宿屋に止宿しているのです

から二人は肩をならべて歩き始めました。

「ずいぶん賑やかですね。」と、わたしは言いました。「そんなものを買ってどうするんです。」

「伊佐子さんにお土産ですよ。」と、山岸はまた笑っていました。「去年も買って行ったから今年も吉例だね。」

「高いでしょう。」と、そんな物の相場を知らない私は訊ききました。

「なに、思い切って値切り倒して……。それでも初酉だから、商人の鼻息がなかなか荒い。」

そんなことを言いながら四谷見附の方角へむかって来ると、山岸はあるコーヒー店の前に立ちどまりました。

「君、どうです。お茶でも飲んで行きませんか。」

かれは先に立って店へはいつたので、わたしもあとから続いてはいると、幸いに隅の方のテーブルが空すいたので、二人はそこに陣取って、紅茶と菓子を注文しました。

「須田君はお酒を飲まないんですね。」

「飲みません。」

「ちつともいけないんですか。」

「ちつとも飲めません。」

「わたしも御同様だ。少しは飲めるといいんだが……。」と、山岸は何か考えるように言いました。「この二、三年来、なんとかして飲めるようになりたいと思って、ずいぶん勉強してみたんで

すがね。どうしても駄目ですよ。」

飲めない酒をなぜ無理に飲もうとするのかと、年の若い私はすこしおかしくなりました。その笑い顔をながめながら、山岸はやはり子細ありそうに溜息をつきました。

「いや、君などは勿論飲まない方がいいですよ。しかし私などは少し飲めるといいんだが……。」と、彼は繰返して言いましたが、やがて又俄かに笑い出しました。「なぜと行って……。少しは酒を飲まないと伊佐子さんに嫌われるんでね。ははははは。」

山岸の方はどうか知らないが、伊佐子さんがとにかく彼に接近したがって、いわゆる秋波を送っているらしいのは、他の止宿人もみな認めているのでした。堀川の家では、伊佐子さんが姉で、

京都へ行っている長男は弟だそうです。伊佐子さんは廿一の年に他へ縁付いたのですが、その翌年に夫が病死したので、再び実家へ戻つて来て、それからむなしく七、八年を送っているという気の毒な身の上であることを、わたし達も薄々知っていました。容貌りようもまず十人並以上で阿母おつかさんとは違つてなかなか元氣のいい活潑な婦人でしたが、氣のせいか、その蒼白い細おもてがやや寂しく見えるようでした。

山岸は三十前後で、体格もよく、顔色もよく、ひと口にいえばいかにも男らしい風采の持主でした。その上に、郷里の実家が富裕であるらしく、毎月少なからぬ送金を受けているので、服装もよく、金づかいもいい。どの点から見ても七人の止宿人のうちで

は彼が最も優等であるのですから、伊佐子さんが彼に眼をつけるのも無理はないと思われました。いや、彼女が山岸に眼をつけていることは、奥さんも内々承知していながら、そのまま黙許しているらしいという噂もあるくらいですから、今ここで山岸の口から伊佐子さんのことを言い出されても、私はさのみ怪しみもしませんでした。勿論、妬むなどという気はちつとも起りませんでした。

「伊佐子さんは酒を飲むんですか。」と、わたしも笑いながら訊きました。

「さあ。」と、山岸は首をかしげていました。「よくは知らないが、おそらく飲むまいな。私にむかっても、酒を飲むのはおよし

なさいと忠告したくらいだから……。」

「でも、酒を飲まないと、伊佐子さんに嫌われると言ったじゃありませんか。」

「あははははは。」

彼があまりに大きな声で笑い出したので、四組ほどの他の客がびつくりしたようにこつちを一度に見返ったので、わたしは少しまりが悪くなりました。茶を飲んで、菓子を食って、その勘定は山岸が払って、二人は再び往来へ出ると、大きい冬の月が堤の松の上に高くかかっています。霽れた夜といっても、もう十一月の初めですから、寒い西北の風がわれわれを送るように吹いて来ました。

四谷見附を過ぎて、麴町の大通りへさしかかると、橋ひとつを境にして、急に世間が静かになったように感じられました。山岸は消防署の火の見を仰ぎながら、突然にこんなことを言い出しました。

「君は幽霊というものを信じますか。」

思いも付かないことを問われて、わたしもすこしく返答に躊躇しましたが、それでも正直に答えました。

「さあ。わたしは幽霊というものについて、研究したこともありませんが、まあ信じない方ですね。」

「そうでしょうね。」と、山岸はうなずきました。「わたしにしても信じたくないから、君なぞが信じないというのは本当だ。」

彼はそれぎりで黙ってしまいました。今日こんにちではわたしも商売柄で相当におしやべりをしますが、学生時代の若い時には、どちらかといえば無口の方でしたから、相手が黙っていれば、こつちも黙っているというふうで、二人は街路樹の落葉を踏みながら、無言で麴町通りの半分以上を通り過ぎると、山岸はまた俄かに立ちどまりました。

「須田君、うなぎを食いませんか。」
「え。」

わたしは山岸の顔をみました。たった今、四谷で茶を飲んだばかりで、又すぐにここで鰻を食おうというのは少しく変だと思っ
ていると、それを察したように彼は言いました。

「君は家で夕飯を食ったでしょうが、わたしは午後に出たぎりです。実はまだ夕飯を食わないんですよ。あのコーヒー店で何か食おうと思ったが、ごたごたしているので止めて来たんです。」

なるほど彼は午後から外出していたのです。それでまだ夕飯を食わずにいるのでは、四谷で西洋菓子を二つぐらい食ったのでは腹の虫が承知しまいと察せられました。それにしても、鰻を食うのは贅沢です。いや、金廻りのいい彼としては別に不思議はないかも知れませんが、われわれのような学生に取っては少しく贅沢です。今日では方々の食堂で鰻を安く食わせますが、その頃のようなぎは高いものと決まっています。殊に山岸がこれからはいろいろとする鰻屋は、ここらでも上等の店でしたから、わたしは遠慮

しました。

「それじゃあ、あなたひとりで食べていらつしやい。わたしはお先へ失敬します。」

行きかけるのを、山岸は引止めました。

「それじゃあいけない。まあ、付き合いに来てくれたまえ。鰻を食うばかりじゃない、ほかにも少し話したいことがあるから。いや、嘘じゃない。まったく話があるんだから……。」

断り切れないで、私はとうとう鰻屋の二階へ連れ込まれました。

ここで山岸とわたしとの関係を、さらに説明しておく必要があります。

山岸はわたしと同じ下宿屋に住んでいるという以外に、特別にわたしに対して一種の親しみを持っていてくれるのは、二人がおなじ職業をこころざしているのと、わたしが先輩として常に彼を尊敬しているからでした。わたしも将来は弁護士として世間に立つつもりで勉強中の身の上ですから、自分よりも年上の彼に対して敬意を払うのは当然です。単に年齢の差があるばかりでなく、その学力においても、彼とわたしとは大いに相違しているのです。山岸は法律上の知識は勿論、英語のほかにドイツ、フランスの語学にも精通していましたから、わたしはいい人と同宿したの

を喜んで、その部屋へ押しかけて行っているの事を訊くと、彼もまた根こんよく親切に教えてくれる。そういうわけですから、山岸という男はわたしの師匠といつてもいいくらいで、わたしも彼を尊敬し、彼もわたしを愛してくれたのです。

唯ここに一つ、わたしとして不思議でならないのは、その山岸がこれまでに四回も弁護士試験をうけて、いつも合格しないということでした。あれほどの学力もあり、あれほどの胆力もありながら、どうして試験に通過することが出来ないのか。わたしの知っている範囲内でも、その学力はたしかに山岸に及ばないと思われる人間がいずれも無事に合格しているのです。勿論、試験というものは一種の運だめしで、実力の優まさったものが必ず勝つとも限

らないのですが、それも一回や二回ではなく、三回も四回もおなじ失敗をくり返すというのは、どう考えても判りかねます。

「わたしは気が小さいので、いけないですね。」

それに対して、山岸はこう説明しているのですが、わたしの視るところでは彼は決して小胆の人物ではありません。試験の場所に臨んで、いわゆる「場打ばうて」がするような、気の弱い人物とは思われません。体格は堂々としている。弁舌は流暢である。どんな試験官でも確かに採用しそうな筈であるのに、それがいつでも合格しないのは、まったく不思議と言うのほかはありません。それでも彼は、郷里から十分の送金を受けているので、何回の失敗にもさのみ屈する気色けしきもみせず、落ちつき払って下宿生活をつづ

けているのです。わたしは彼に誘われて、ここの鰻の御馳走になったのは、今までにも二、三回ありました。

「君などは若い盛りで、さつき食った夕飯などはとうの昔に消化してしまつた筈だ。遠慮なしに食いたまえ、食いたまえ。」

山岸にすすめられて、私はもう遠慮なしに食い始めました。ともかくも一本の酒を注文したのですが、二人ともほとんど飲まないで、唯むやみに食うばかりです。蒲焼の代りを待っているあいだに、彼は静かに言い出しました。

「実はね、わたしは今年かぎり郷里へ帰ろうかと思つていますよ。」

私はおどろきました。すぐには何とも言えないで、黙つて相手

の顔を見つめっていると、山岸はすこしく容かたちをあらためました。

「甚だ突然で、君も驚いたかも知れないが、わたしもいよいよ諦めて帰ることにしました。どう考えても、弁護士という職業はわたしに縁がないらしい。」

「そんなことはないでしょう。」

「私もそんなことはないと思っていた。そんな筈はないと信じていた。幽霊がこの世にないと信じるのと同じように……。」

さつきも幽霊と言い、今もまた幽霊と言い出したのが、わたしの注意をひきました。しかし黙って聴いていると、彼は更にこんなことを言い出しました。

「君は幽霊を信じないと言いましたね。わたしも勿論、信じなか

った。信じないどころか、そんな話を聴くと笑っていた。その私
が幽霊に責められて、とうとう自分の目的を捨てなければならな
い事になったんですよ。幽霊を信じない君たちの眼から見れば、
実にばかばかしいかも知れない。まあ、笑ってくれたまえ。」

わたしは笑う気にはなれませんでした。山岸の口からこんなこ
とを聞かされる以上、それには相当の根拠がなければならぬ。
といて、まさか幽霊などというものがこの世にあらうとは思わ
れない。半信半疑でやはり黙っていると、山岸もまた黙って天井
の電燈をみあげていました。広い二階に坐っているのはわれわれ
の二人ぎり、隅々からにじみ出して来る夜の寒さが人に迫るよ
うにも思われました。

しかし今夜もまだ九時ごろです、表には電車の往来するひびきが絶えずごうごうと聞えています。下では鰻を焼く団扇うちわの音がぱたぱたと聞えます。思いなしか、頭の上の電燈が薄暗くみえても、床の間に生けてある茶の花の白い影がわびしく見えても、怪談らしい気分を深めるにはまだ不十分でした。もちろん山岸はそんなことに頓着する筈もない、ただ自分の言いたいだけの事を言えればいいのでしよう。やがて又向き直って話しつづけました。

「自分の口から言うのも何だが、わたしはこれまでに相当の勉強もしたつもりで、弁護士試験ぐらいはまず無事にパスするとう自信を持っていたんですよ。うぬぼれかも知れないが、自分ではそう信じていたんです。」

「そりやそうです。」と、私はすぐに言いました。「あなたのような人がパスしないという筈はないんですから。」

「ところが、いけないからおかしい。」と、山岸はさびしく笑いしました。「君も御承知だろうが、こととして四回つづけて見事に失敗している。自分でも少し不思議に思うくらいで……。」

「私もまったく不思議に思っているんです。どういうわけでしょう。」

「そのわけは……。今も言う通り、わたしは幽霊に責められているんですよ。いや、実にばかばかしい。われながら馬鹿げ切っていると思うのだが、それが事実であるからどうにも仕様がなない。今まで誰にも話したことはないが、わたしが初めて試験を受けに

出て、一生懸命に答案を書いていると、一人の女のすがたが私の
眼の前にぼんやりと現われたんです。場所が場所だから、女なぞ
が出て来るはずがない。それは瘦形で背の高い、髪の毛の白い女
で、着物は何を着ているかはつきりと判ら^{わか}ないが、顔だけはよく
見えるんです。髪の毛の白いのを見ると、老人かと思われるが、その
顔は色白の細おもてで、まだ三十を越したか越さないか位にも見
える。そういう次第で、年ごろの鑑定は付かないが、髪の毛の真
っ白であるだけは間違いない。その女がわたしの机の前に立って、
わたしの書いている紙の上を覗き込むようにじつと眺めていると、
不思議にわたしの筆の運びがぶくなって、頭もなんだか茫とし
て、何を書いているのか自分にも判らなくなつて来る……。君は

その女をなんだと思います。」

「しかし……。」と、わたしは考えながら言いました。「試験場には大勢の受験者が机をならべているんでしょう。しかも昼間でしよう。」

「そうですね、そうですね。」と、山岸はうなずきました。「まつ昼間で、硝子窓の外には明るい日が照っている。試験場には大勢の人間がならんでいる。そこへ髪の毛の白い女の姿があらわれるんですよ。勿論、他の人には見えないらしい。わたしの隣りにいる人も平気で答案を書きつづけているんです。なにしろ、私はその女に邪魔をされて、結局なんだか判らないような答案を提出することになる。何がなんだか滅茶苦茶で、自分にも訳が判らないよ

うなものを書いて出すのだから、試験官が明き盲でない限り、そんな答案に対して及第点をあたえてくれる筈がない。それで第一回の受験は見ごとに失敗してしまった。それでも私はそれほど悲観しませんでした。元來がのん気な人間に生れ付いているのと、もう一つには、幸いに郷里の方が相当に暮らしているので、一年や二年は遊んでいても困ることはないという安心があつたからでした。」

「そこで、あなたはその女に就いてどう考えておいでになつたんです。」

「それは神経衰弱の結果だと見ていました。」と、山岸は答えました。「幾らのん気な人間でも、試験前には勉強する。殊にその

当時は学校を出てから間もないので、毎晩二時三時ごろまでも勉強していたから、神経衰弱の結果、そういう一種の幻覚を生じたものだろうと判断しました。したがって、さのみ不思議とも思いませんでした。」

「その女はそれぎり姿を見せませんでしたか。」と、わたしは追いかけるように訊いた。

「いや、お話はこれからですよ。その頃わたしは神田に下宿していたんですが、何分にも周囲がそうぞうしくって、いよいよ神経を苛立いらだたせるばかりだと思つたので、さらに小石川の方へ転宿して、その翌年に第二回の試験を受けると、これも同じ結果に終わりました。わたしの机の前には、やはり髪かみの白い女の姿があらわれ

て、わたしが書いている紙の上をじつと覗いているんです。畜生、又来たかと思つても、それに対抗するだけの勇気がないので、又もや眼が眩くらんで、頭がぼんやりして、なんだか夢のような心持になつて……。結局めちやめちやの答案を提出して……。それでも私はまだ悲観しませんでした。やはり神経衰弱が祟っているんだと思つて、それから三月ほども湘南地方に転地して、唯ぶらぶら遊んでいると、頭の具合もすっかり好くなつたらしいので、東京へ歸つて又もや下宿をかえました。それが現在の堀川の家で、今までのうちでは一等居ごろのいい家ですから、ここならば大いに勉強が出来ると思つて喜んでいると、去年は第三回の受験です。近来は健康も回復しているし、試験の勝手もよく判っているし、今度

こそはという意気込みで、わたしは威勢よく試験場へは行って、答案をすらすらと書きはじめると、髪の高い女が又あらわれまして。いつも同じことだから、もう詳しく言うまでもありますまい。わたしはすごすごと試験場を出ました。」

あり得^うべからざる話を聴かされて、わたしも何だか夢のような心持になって来ました。そこへ蒲焼のお代りを運んで来ました。わたしはもう箸をつける元気がない。それは満腹の為ばかりではなかったようです。山岸も皿を見たばかりで、箸をとりませんでした。

うなぎを食うよりも、話のつづきを聞く方が大事なので、わたしは誘いかけるように又訊きました。

「そうすると、それもやっぱり神経のせいでしょうか。」

「さあ。」と、山岸は低い溜息を洩らしました。「こうなると、わたしも少し考えさせられましたよ。実は今まで郷里の方に対して、受験の成績は毎回報告していましたが、髪の毛の白い女のことなどはいつさい秘密にしていました。そんなことを言ってやったところで、誰も信用する筈もなし、落第の申訳にそんな奇怪な事実を捏造ねつぞうしたように思われるのも、あまり卑怯らしくって残念だから、どこまでも自分の勉強の足らないことにして置いたのです。

ねえ、そうでしよう。わたしの眼にみえるだけで、誰にも判らないことなんだから、いくら本当だと主張したところで信用する者はありませんまい。まして自分自身も神経衰弱の祟りと判断しているくらいだから、そんな余計なことを報告してやる必要もないと思つて、かたがたその儘にして置いたんですが、三度が三度、同じことが続いて、おなじ結果になるというのは少しおかしいと自分でもやや疑うようになって来た。そこへ郷里の父から手紙が来て、ちよつと帰つて来いというんです。父は九州のFという町でやはり弁護士を開業しているんですが、早い子持ちで、廿三の年にわたしを生んだのだから、去年は五十二で、土地の同業者間ではまずいい顔になっている。そのおかげで私もまあこうしてぶら

ぶらしていられるんですが……。その父も毎々の失敗にすこし呆れたんでしょう。ともかくも一度帰って来いというので、去年の暮から今年の正月にかけて……。それは君も知っているでしょう。それから東京へ帰って来たときに、わたしの様子に何か変わったところがありませんか。」

「いいえ、気がつきませんでした。」と、わたしは首をふりました。

「そうでしたか。なんぼ私のような人間でも、三回も受験に失敗しているんだから、久しぶりで国へ帰って、父の前へ出ると、さすがにきまりが悪い。そこは人情で、なにかの言い訳もしたくなる。その言い訳のあいだに口がすべって、髪の白い女のことをう

っかりしやべってしまったんです。すると、父は俄かにくちびるを屹きつと結んで、しばらく私の顔を見つめていたが、やがて厳肅な口調で、お前それは本当かという。本当ですと答えると、父は又だまってしまって、それぎりなんにも言いませんでしたが、さてそうなるかと私の疑いはいよいよ深くならざるを得ない。父の様子から想像すると、これには何か子細のあることで、単にわたしの神経衰弱とばかりは言っていられないような気がするじやありませんか。その時はまあそれで済んだんですが、それから二、三日の後、父はわたしに向って、もう東京へ行くのは止せ、弁護士試験など受けるのは思い切れと、こう言うんです。実家に居据わつていても仕方がないので、わたしは父に向って、お願いですから、

もう一度東京へやっってください。万一ことしの受験にも失敗するようであったら、その時こそは思い切って帰郷しますと、無理に父を口説いて再び上京しました。したがって、ことしの受験はわたしに取っては背水の陣といったようなわけで、平素のん気な人間も少しく緊張した心持で帰って来たんです。それが君たちに覺られなかったとすると、私はよほどのん気にみえる男なんでしょうね。」

山岸は又さびしく笑いながら語りつづけました。

「ところで、ことしの受験もあの通りの始末……。やはり白い髪の毛に祟られたんですよ。かれは今年も依然として試験場にあらわれて、わたしの答案を妨害しました。言うまでもない事だが、

試験場におけるわたしの席は毎年変っている。しかもかれは同じように、影の形に従うがごとくに、私の前にあらわれて来るのだから、どうしても避ける方法がない。わたしはこの幽霊——まず幽霊とでもいうのほかはありませんまい。この幽霊のために再三再四妨害されて、実に腹が立つてたまらないので、もうこうなつたら根くらべ意地くらべの決心で、来年も重ねて試験を受けようと思つていたところが、二、三日前に郷里の父から手紙が来て、今度こそはどうしても帰れというんです。この正月の約束があるから、わたしももう強情を張り通すわけにもいかないのと、もう一つ、わたしに強い衝動をあたえたのは、父の手紙にこういうことが書いてあるんです。たとい無理に試験を通過したところで、弁

護士という職業を撰むことは、お前の将来に不幸をまねく基もとであるらしく思われるから、もう思い切って帰郷して、なにか他の職業を求めることにして。お前として今までの志望を抛棄するのは定めて苦痛であろうと察せられるが、お前にばかり強しいのではない、わたしも今年かぎり登録を取消して弁護士を廃業する。」

「なぜでしょう。」と、わたしは思わず喙くちをいれました。

「なぜだか判らない。」と、山岸は思いあげに答えました。

「しかし判らないながらも、なんだか判ったような気もするので、わたしもいよいよ思い切って東京をひきあげて、年内に帰国するつもりです。父はF町の近在に相当の土地を所有している筈だから、草花でも作って、晩年を送る気になったのかも知れない。わ

たしも父と一緒に園芸でもやってみるか、それとも何か他の仕事に取りかかるか、それは帰郷の上でゆっくり考えようと思つてゐるんです。」

わたしは急にさびしいような、薄暗い心持になりました。どんな事情があるのか知れないが、父も弁護士を廃業する、その子も弁護士試験を断念して帰る。それだけでも聞く者のこころを暗くさせるのに、さらに現在のわたしとしては、自分が平素尊敬している先輩に捨てて行かれるのが、いかにも頼りないような寂しい思いに堪えられないので、黙って俯向いてその話を聞いていると、山岸は又言いました。

「今夜の話はこの場かぎり、当分は誰にも秘密にしておいてく

れたまえ。いいかい。奥さんにも伊佐子さんにも暫く黙っていてくれたまえ。」

奥さんはともあれ、伊佐子さんがこれを知ったら定めて驚くことであろうと、わたしは気の毒に思いましたが、この場合、かれこれ言うべきではありませんから、山岸の言うがままに承諾の返事をして置きました。

お代りの蒲焼は二人ともにちつとも箸をつけなかつたので、残して行くのも勿体ないといって、その二人前を折詰にして貰うことにしました。それは伊佐子さんへのお土産にするのだと、山岸は言っていました。熊手と唐の芋と、うなぎの蒲焼と、重ね重ねのおみやげを貰って、なんにも知らない伊佐さんはどんなに喜

ぶことかと思うと、わたしはいよいよ寂しいような心持になりました。

表へ出ると、木枯しとでも言いそうな寒い風が、さつきよりも強く吹いていました。宿へ帰るまで二人は黙って歩きました。

四

おみやげの品々を貰って、伊佐子さんは果して大喜びでした。奥さんも喜んでいました。その呉れ手が山岸であるだけに、伊佐子さんは一層嬉しく感じたのであろうと思うと、わたしは気の毒を通り越して、なんだか悲しいような心持になって来たので、そ

うそうに挨拶して、自分の部屋へはいつてしまいました。

堀川の家で止宿人にあたえている部屋は、二階に五間、下に二間という間取りで、山岸は下の六畳に、わたしは二階の東の隅の四畳半に陣取っているのです。東の隅といっても、東側には隣りの二階家が接近しているので、一間の肱かけ窓は北の往来にむかって開かれていますから、これからは日当りの悪い、寒い部屋になるのです。今夜のような風の吹く晩には、窓の戸をゆする音を聞くだけでも夜の寒さが身に沁みます。もう勉強する元気もないので、私はすぐに冷たい衾よぎのなかにもぐり込みましたが、何分にも眼が冴えて眠られませんでした。いや、眠られないのがあたりまえかとも思いました。

わたしは今夜の話をそれからそれへと繰返して考えました。髪の毛の白い女というのは、いったい何者であろうかとも考えました。山岸はそれを幽霊と信じてしまつたらしいが、さつきも言う通り、白昼衆人のあいだに幽霊が姿をあらわすなどというのは、どうしても私には信じられないことでした。しかも山岸が彼の父にむかつてその話を洩らしたときに、父の態度に怪しむべき点を発見したらしい事を考えると、父には何か思いあたる節ふしがあるのかとも察せられます。ことに父も今年かぎりで弁護士を廃業するから、山岸にも受験を断念しろという。それには勿論、なにかの子細がなければならぬ。それから総合して考えると、これは弁護士という職業に関連した一種の秘密であるらしい。山岸は詳しいこと

を明かさないが、今度の父の手紙にはその秘密を洩らしてあるのかも知れない。そこで彼もとうとう我^がを折つて、にわか^にに帰郷することになったのかも知れない。

わたしの空想はだんだんに拡がって来ました。山岸の父は職業上、ある訴訟事件の弁護をひき受けた。刑事ではあるまい、おそらく民事であろう。それが原告であつたか、被告であつたか知らないが、ともかくも裁判の結果が、ある婦人に甚だしい不利益をあたえることになった。その婦人は、髪の白い人であつた。彼女^{かれ}はそれがために自殺したか、悶死したか、いずれにしても山岸の父を呪いつつ死んだ。その恨みの魂がまぼろしの姿を試験場にあらわして、彼の子たる山岸を苦しめるのではあるまいか。

こう解釈すれば、怪談としてまずひと通りの筋道は立つわけですが、そんな小説めいた事件が実際にあり得るものかどうかは、大いなる疑問であると言わなければなりません。

さつき聞き落したのですが、一体その髪の白い女は試験場にかぎって出現するのか、あるいは平生でも山岸の前に姿をみせるのか、それを詮議しなければならぬ事です。山岸の口ぶりでは、平生は彼女と没交渉であるらしく思われるのですが、それも機会を見てよく確かめて置かなければなりません。そんなことをいろいろ考えているうちに、近所の米屋で、一番鶏の歌う声がきこえました。

あくる朝はゆうべの風のためか、にわかには冬らしい気候になり

ました。一夜をろくろく眠らずに明かした私は、けさの寒さが一層こたえるようでしたが、それでも朝飯をそうそうに食って、いつもの通りに学校へ出て行きました。その頃には風もやんで、青空が高く晴れていました。

留守のあいだに何事か起つてはいはしないかと、一種の不安をいだきながら、午後には学校から帰つて来ますと、堀川の一家にはなんにも変つた様子もなく、伊佐子さんはいつもの通りに働いています。山岸も自分の部屋で静かに読書しているようです。私はまずこれで安心してしていると、午後六時ごろに伊佐子さんがわたしの部屋へ夕飯の膳を運んで来ました。このごろの六時ですから、日はすっかり暮れ切つて、狭い部屋には電燈のひかりが満ちていま

した。

「きようは随分お寒うござんしたね。」と、伊佐子さんは言いました。平生から蒼白い顔のいよいよ蒼ざめているのが、わたしの眼につきました。

「ええ、今からこんなに寒くなっちゃやりきれません。」

いつもは膳と飯櫃めしびつを置いて、すぐに立ちさる伊佐子さんが、今夜は入口に立て膝をしたままで又話しかけました。

「須田さん。あなたはゆうべ、山岸さんと一緒にお帰りでしたね。」

「ええ。」と、わたしは少しあいまいに答えました。この場合、伊佐子さんから山岸のことを何か聞かれては困ると思ったからで

す。

「山岸さんは何かあなたに話しましたか。」と、果して伊佐子さんは訊きはじめました。

「何かとは……。どんな事です。」

「でも、この頃は山岸さんのお国からたびたび電報がくるんですよ。今月になつても、一週間ばかりのうちに三度も電報が来ました。そのあいだに郵便も来しました。」

「そうですか。」と、私はなんにも知らないような顔をしていました。

「それには何か、事情があるんだろうと思われませんが……。あなたはなんにもご承知ありませんか。」

「知りません。」

「山岸さんはゆうべなんにも話しませんでしたか。わたしの推量では、山岸さんはもうお国の方へ帰ってしまふんじゃないかと思うんですが……。そんな話はありませんでしたか。」

わたしは少しぎよつとしましたが、山岸から口止めをされてい
るんですから、迂濶うかつにおしやべりは出来ません。それを見透かし
ているように、伊佐子さんはひと膝すりよつて来ました。

「ねえ。あなたは平生から山岸さんと特別に仲よく交際しておい
でなさるんですから、あの人のことについて何かご存じでしょう。
隠さずに教えてくださいませんか。」

これは伊佐子さんとして無理からぬ質問ですが、その返事には

困るのです。一つ家に住んでいながら、一体この伊佐子さんと山岸との関係がどのくらいの程度にまで進んでいるのか、それを私はよく知らないのです、こういう場合にはいよいよ返事に困るのです。しかし山岸との約束がある以上、わたしは心苦しいのを我慢して、あくまで知らない知らないを繰り返しているのほかはありません。そのうちに伊佐子さんの顔色はますます悪くなつて、飛んでもないことを言い出しました。

「あの、山岸さんという人は怖ろしい人ですな。」

「なにが怖ろしいんです。」

「ゆうべお土産だといって、うなぎの蒲焼をくれたでしょう。あれが怪しいんですよ。」

伊佐子さんの説明によると、ゆうべあの蒲焼を貰った時はもう夜が更けているので、あした食うことにして台所の戸棚にしまっておいた。この近所に大きい黒い野良猫がいる。それがきょうの午前中に忍び込んできて、女中の知らない間に蒲焼の一と串をくわえ出して、裏手の掃溜はきだめのところまで食っていたかと思うと、口から何か吐き出して死んでしまった。猫は何かの毒に中あたつたらしいというのです。

こうなると、わたしも少しく係合いがあるような気がして、そのまま聞き捨てにはならないことになります。

「猫はまったくそのうなぎの中毒でしょうか。」と、私は首をかじげました。「そうして、ほかの鰻はどうしました。」

「なんだか気味が悪うござんすから、母とも相談して、残っていた鰻もみんな捨てさせてしまいました。熊手も毀こわして、唐の芋も捨ててしまいました。」

「しかし現在、その鰻を食ったわれわれは、こうして無事でいるんですが……。」

「それだからあの人は怖ろしいと言うんです。」と、伊佐子さんの眼のひかりが物凄くなりました。「おみやげだなんて親切らしいことを言つて、わたし達を毒殺しようと巧たくらんだのじゃないかと思うんです。さもなければ、あなた方の食べた鰻には別条がなくつて、わたし達に食べさせる鰻には毒があるというのが不思議じゃありませんか。」

「そりや不思議に相違ないんですが……。それはあなた方の誤解ですよ。あの鰻は最初からお土産にするつもりで拵えたのじゃない、われわれの食う分が自然に残って、おみやげになったんですから……。わたしは始終一緒にいましたけれど、山岸さんが毒なぞを入れたような形跡は決してありません。それはわたしが確かに保証します。鰻がひと晩のうちにどうかして腐敗したのか、あるいは猫が他の物に中毒したのか、いずれにしても山岸さんや私には全然無関係の出来事ですよ。」

わたしは熱心に弁解しましたが、伊佐子さんはまだ疑っているような顔をして、成程そうかとも言わないばかりか、いつまでもいやな顔をして睨んでいるので、わたしは甚だしい不快を感じま

した。

「あなたは どうしてそんなに山岸さんを疑うんですか。単に猫が死んだというだけのことですか、それともほかに理由があるんですか。」と、わたしは詰問するように訊きました。

「ほかに理由がないでもありません。」

「どんな理由ですか。」

「あなたには言われません。」と、伊佐子さんはきっぱりと答えました。余計なことを詮議するなというような態度です。

わたしはいよいよむっとしましたが、俄かにヒステリーになつたような伊佐子さんを相手にして、議論をするのも無駄なことだと思ひ返して、黙ってわきを向いてしまいました。そのときあた

かも下の方から奥さんの呼ぶ声がきこえたので、伊佐子さんも黙つて出て行きました。

ひとりで飯を食いながら、わたしはまた考えました。余の事とは違つて、仮りにも毒殺などとは容易ならぬことです。伊佐子さんばかりでなく、奥さんまでが本当にそう信じているならば、山岸のために進んでその冤えんをすすぐのが自分の義務であると思ひました。それにしても、本人の山岸はそんな騒ぎを知っているのかどうか、まずそれを訊きただしておく必要があるとも考えたので、飯を食つてしまうとすぐに二階を降りて山岸の部屋へたずねていくと、山岸はわたしよりもさきに夕飯をすませて、どこへか散歩に出て行つたということでした。

わたしも頭がむしやくしやして、再び二階の部屋へもどる気にもなれなかつたので、何がなしに表へふらりと出てゆくと、そのうしろ姿をみて、奥さんがあとから追って来ました。

「須田さん、須田さん。」

呼びとめられて、わたしは立ちどまりました。家から一五、六間も離れたところで、路のそばには赤いポストが寒そうに立っています。そこにたたずんで待っていると、奥さんは小走りに走って来て、あとを見返りながら小声で訊きました。

「あの……。伊佐子が……。あなたに何か言いはしませんでしたか。」

なんと答えようかと、私はすこしく考えていると、奥さんの方

から切り出しました。

「伊佐子が何か鰻のことを言いはしませんか。」

「言いました。」と、わたしは思い切つて答えました。「ゆうべの鰻を食つて、黒猫が死んだとかいうことを……。」

「猫の死んだのは本当ですけれど……。伊佐子はそれを妙に邪推しているのです、わたしも困つていのです。」

「まったく伊佐子さんは邪推しているのです。積もつてみても知れたことで、山岸さんがそんな馬鹿なことをするもんですか。」

わたしの声が可なりに荒かつたので、奥さんもやや躊躇しているようでしたが、再びうしろを見返りながらささやきました。

「あなたも御存じだかどうだか知りませんが、このごろ山岸

さんのところへお国の方から電報や郵便がたびたび来るので、娘はひどくそれを気にしているのです。山岸さんは郷里へ帰るようになったのじゃあないかと言つて……。」

「山岸さんがもし帰るようならば、どうすると言うんです。伊佐子さんはあの人と何か約束したことでもあるんですか。」と、わたしは無遠慮に訊き返した。

奥さんは返事に困つたような顔をして、しばらく黙つていましたが、その様子を見て私にも覺られました。ほかの止宿人たちが想像していたとおり、山岸と伊佐子さんとのあいだには、何かの糸がつながつていて、奥さんもそれを黙認しているに相違ないのです。そこで、わたしはまた言いました。

「山岸さんはああいう人ですから、万一帰郷するようになったか
らといって、無断で突然たち去る気づかいはありません。きっと
あなたがたにも事情を説明して、なにごとにも円満に解決するよう
な方法を講じるに相違ありませんから、むやみに心配しない方が
いいでしょう。伊佐子さんがなんとと言っても、うなぎの事件だけ
は山岸さんにとってたしかに冤罪です。」

伊佐子さんに話したとおりのことを、わたしはここで再び説明
すると、奥さんは素直にうなずきました。

「そりやそうでしょう。あなたの仰しやるのが本当ですよ。山岸
さんが、なんでそんな怖ろしいことをするのですか。それはよ
く判っているのですけれど、伊佐子はふだんの気性にも似合わず、

このごろは妙に疑い深くなって……。」「

「ヒステリーの気味じゃあないんですか。」

「そうでしょうか。」と、奥さんは苦勞ありそうに、眉をひそめました。

伊佐子さんに対しては一種の義憤を感じていた私も、おとなしい奥さんの悩ましげな顔色をみていると、又にかかに気の毒のような心持になって、なんとか慰めてやりたいと思つているところへ、あたかも集配人がポストをあけに來たので、ふたりはそこを離れなければならぬことになりました。

そのときに気がついて見返ると、伊佐さんが門かどぐち口に立つて遠くこちらを窺っているらしいのが、軒燈の薄紅い光りに照らし

だされているのです。わたし達もちよつと驚いたが、伊佐子さんの方でも自分のすがたを見付けられたのを覚つたらしく、消えるように内へ隠れてしまいました。

五

奥さんに別れて、麴町通りの方角へふた足ばかり歩き出した時、あたかも私の行く先から、一台の自動車が走ってきました。あたりは暗くなっているなかで、そのヘッド・ライトの光りが案外に弱くみえるので、私はすこしく変だと思いながら、すれ違ふときにふと覗いてみると、車内に乗っているのは一人の婦人でした、

その婦人の髪が真っ白に見えたので、わたしは思わずぞつとして立停まる間に、自動車は風のように走り過ぎ、どこへ行つてしまつたか、消えてしまつたか、よく判りませんでした。

これはおそらく私の幻覚でしょう。いや、たしかに幻覚に相違ありません。髪の白い女の怪談を山岸から聞かされていたので、今すれちがつた自動車の乗客の姿が、その女らしく私の眼を欺いたのでしよう。またそれが本当に髪の白い婦人であつたとしても、白髪の老女は世間にはたくさんあります。単に髪が白いというだけのこと、それが山岸に崇つている怪しい女であるなどとい途いちずに決めるわけにはいきません。いずれにしても、そんなことを気にかけるのは万々ばんばん間違つてしていると承知していながら、私はなん

だか薄気味の悪いような、いやな心持になりました。

「はは、おれはよっぽど臆病だな。」

自分で自分を嘲りながら、私はわざと大股にあるいて、灯の明るい電走路の方へ出ました。ゆうべのような風はないが、今夜もなかなか寒い。何をひやかすということもなしに、四谷見附までぶらぶら歩いて行きましたが、帰りの足は自然に早くなりました。帽子もかぶらず、外套も着ていないので、夜の寒さが身にしみて来たのと、留守のあいだにまた何か起つていはしまいかという不安の念が高まってきたからです。家へ近づくにしたがつて、わたしの足はいよいよ早くなりました。裏通りへはいると、月のひかりは霜を帯びて、その明るい町のどこやらに犬の吠える声が遠く

きこえました。

堀川の家の門かどをくぐると、わたしは果して驚かされました。わたしが四谷見附まで往復するあいだに、伊佐子さんは劇薬を飲んで死んでしまったのでした。山岸はまだ帰りません。その明き部屋へはいり込んで、伊佐子さんは自殺したのです。その帯のあいだには母にあてた一通の書置を忍ばせていて、「わたしは山岸という男に殺されました」と、簡単に記しるしてあつたそうです。奥さんもびつくりしたのですが、なにしろ劇薬を飲んで死んだのですから、そのままにしておくことは出来ません。わたしの帰ったときには、あたかも警察から係官が出張して臨検の最中でした。

猫の死んだ一件を女中がうっかりしやべつたので、帰るとすぐ

に私も調べられました。そこへあたかも山岸がふらりと帰ってきたので、これは一応の取調べぐらいではすみません、その場から警察へ引致いんちされました。伊佐子さんは自殺に相違ないのですが、猫の一件があるのと、その書置に、「山岸という男に殺されました」などと書いてあるので、山岸はどうしても念入りの取調べを受けなければならぬことになったのです。

警察の取調べに対して、山岸は伊佐子さんとの関係をあくまでも否認したそうです。

「ただ一度、ことしの夏の宵のことでした。わたしが英国大使館前の桜の下を涼みながらに散歩していると、伊佐子さんがあとかからついてきて、一緒に話しながら小一時間ほど歩きました。その

ときに伊佐子さんが、あなたはなぜ奥さんをお貰いなさらないのだと訊きましたから、幾年かかっても弁護士試験をパスしないよ
うな人間のところへ、おそらく嫁にくる者がありますまいと、わ
たしは笑いながら答えますと、伊佐子さんは押返して、それでも、
もし奥さんになりたいという人があつたらどうしますと言います
から、果してそういう親切な人があれば喜んで貰いますと答えた
ように記憶しています。ただそれだけのことで、その後伊佐子
さんからなんにも言われたこともなく、わたしからもなんにも言
ったことはありません。」

奥さんもこう申立てたそうです。

「娘が山岸さんを恋しがっているらしいのは、わたくしも薄々察

しておりました、もし出来るものならば、娘の望みどおりにさせてやりたいと願っておりましたが、二人のあいだに何かの関係があつたとは思われません。」

ふたりの申口が符合しているのをみると、伊佐子さんは単に山岸の帰郷を悲観して、いわゆる失恋自殺を遂げたものと認めるのほかないことになりました。猫を殺したのも伊佐子さんの仕業で、劇薬の効き目を試すために、わざと鰻に塗りつけて猫に食わせたのであろうと想像されました。猫の死骸を解剖してみると、その毒は伊佐子さんが飲んだものと同一であつたそうです。

ただ判りかねるのは、伊佐子さんがなぜあの猫の死を証拠にして、山岸が自分たち親子を毒殺しようと企てたなどと騒ぎ立てた

かということですが、それも失恋から来た一種のヒステリーであるといえばそれまでのことで、深く詮議する必要はなかったのかも知れません。

そんなわけで、山岸は無事に警察から還されて、この一件はなんの波瀾をもまき起さずにらくちやく落着きました。ただここに一つ、不思議ともいえばいわれるのは、伊佐子さんの死骸の髪の毛が自然に変色して、いよいよ納棺というときには、老女のような白い髪に変ってしまったことです。おそらく劇薬を飲んだ結果であろうという者もありましたが、通夜の席上で奥さんはこんなことを話しました。

「あの晩、須田さんに別れて家へ帰りますと、伊佐子の姿はみえ

ません。たった今、内へはいつた筈だが、どこへ行つたのかと思
いながら、茶の間の長火鉢のまえに坐る途端に、表へ自動車の停
まるような音がきこえました。誰が来たのかと思つてみると、そ
れぎりではきはひっそりしています。はてな、どうも自動車が停ま
つたようだがと、起つて出てみると表にはなんにもいないのです。
すこし不思議に思つて、そこらを見まわしていると、女中があわ
てて駈け出して来て、大変だ大変だと言いますから、驚いて内へ
引つ返すと、伊佐子は山岸さんの部屋のなかに倒れていました。」
ほかの人たちは黙つてその話を聴いていました。山岸もだまつ
ていました。私だけは黙つていられないような気がしたので、そ
の自動車は……と、言おうとして、また躊躇しました。なんにも

知らない奥さんの前で、余計なことを言わない方がよかろうと思つたからです。

伊佐子さんの葬儀を終つた翌日の夜行列車で、山岸は郷里のF町へ帰ることになつたので、わたしは東京駅まで送つて行きました。

それは星ひとつ見えない、暗い寒い宵であつたことを覚えています。待合室にいるあいだに、かの自動車の一件をそつと話しますと、山岸は唯うなずいていました。そのときに私は訊きました。「髪の毛の白い女というのは、あなたが試験場へはいつた時だけに見えるんですか、そのほかの時にも見えるんですか。」

「堀川の家へ行つてからは、平生でも時々見えることがあります。」と、山岸は平気で答えました。「今だから言いますが、その女の顔は伊佐子さんにそっくりです。伊佐子さんは死んでから、その髪の毛が白くなつたというが、わたしの眼には平生から真っ白に見えていましたよ。」

わたしは思わず身を固くした途端に、発車を知らせるベルの音がきこえました。

青空文庫情報

底本：「異妖の怪談集 岡本綺堂伝奇小説集 其ノ二」原書房

1999（平成11）年7月2日第1刷

初出：「文藝俱樂部」

1928（昭和3）年8月

※「啄《くち》」と「喙《くち》」、「古老」と「故老」の混在は底本の通りとしました。

入力：網迫、土屋隆

校正：門田裕志、小林繁雄

2005年6月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

白髪鬼

岡本綺堂

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>